

# 九重山の山伏

## 松岡 実

九重山は九州のシンボルである。海拔一七八七・九米。一七〇〇米クラスの山口峯、一〇〇〇米クラスの山30峯をもって、九州の真ん中にどっしりと巨体を横たえ、古くから九州人の心の住みかとして崇められてきたのである。山それ自体が神としてあおがれた樓触之峰の昔から、さらに最澄伝教大師の宇佐講經以来、山岳仏教天台宗のメッカとなつて九州人の信仰の対象となつてきたのである。中世6院16坊の修験寺院が栄えたが、近世にはいと、南麓久住には久住山猪鹿狼寺が、また山中、坊ケツルには九重山法華院弘藏坊が、硫黄山には九重山金山坊がそれぞれ九重山の信仰を広め、一方大船山に国恩院があつて盛感を張つたのである。これらの信仰の中心は、法華院と猪鹿狼寺兩者ともに久住山頂付近の御池であり、また九重山金山坊は硫黄山の噴火口であつた。一方大船山も山頂御池の神秘境であり、これら火と水の神秘にあこがれ、岳詣りの熱烈な信仰登山者はあとを絶たなかつたのである。九重の山々を開き、九重の山々に親しんだ一群の山伏修

験者たちは、九重登山者の先駆者であり、九重に今日の隆盛をもたらしたパイオニアであることを忘れてはならない。

### 一、九重山法華院弘藏坊

#### 法華院の歴史

海拔一三〇三米。九州最高の温泉場として、九重登山者のメッカとなつている法華院温泉が、九重山白水寺法華院弘藏坊の後身である。ここの歴史については法華院勝光院が明和七年龍泉山英雄師に依頼して作つた九重山記（法華院温泉弘藏祐夫氏蔵）に詳しいので、九重山記を参考にして歴史の跡を辿つてみよう。

#### 九重山法華院のはじまり

九重の名は、九重山が人皇2代倭迹天皇を奉請して12所大明神を祭り、九重の帝都にならつて山名を付けたもので、上・中・下宮があり、本御門、北御門などが存するのはそのためである。寺は白水、院は法華、坊は弘藏と称し、東西南北など五つの支院があり、その創建は何時の時代かわからない。法華院の地は奥深く険阻で、人が容易に行かれない秘境である。

## 古莊親光公の再建

明応の頃、朽網城主古莊下野守親光公がこの地に登って、そのさびれたさまをみて歎き、再建の工を起こした。そこで層僚高閣が建ち上がり、山岳寺院として大いに栄えたのである。

## 島津家久の焼打ち

天正14年薩摩の島津義久の先将家久が襲来して、大野・直入郡内の神社仏閣を焼き払ったさい、当山もまた島津軍の兵火に罹った。その後寺僧がわずかに茅庵を結んで居住したという。

## 二位坊長円の再興

慶長19年(一六一四)二位坊長円は募金して護摩堂を造立、中宮とした。また元和9年(一六二三)募金して上宮を建立、呂長竹下伊兵衛康次が協力して造立に当り、ひき続いて下宮を造った。

## 勝光院豪尊の功績

寛永9年(一六三二)玖珠郡田野村の人々が国境について異議をい

殿がともに肥後の熊本城を守っていた。(この年6月将軍家光・加藤忠広の封を没したためである)。そこで院主勝光院豪尊は有氏呂長竹下権左衛門が鯛口の銘文を写して熊本に行き、これを証拠として境界がきちんときまつた。久盛公が帰国のさい、豪尊を召し出しておめえを許したが、国境を正しく定めた功を賞して領地を与えた。豪尊は辞退して「どうか年中領内を巡回して教化することを許されたい。これが教教修業者の本志である」と述べた。そこで久盛公は役人に命じて家毎に米1升ずつ出すようにさせた。かつ硫黄山を与え山院の雑費に当てた。これが年の始めにおめえして硫黄を献上するいわれである。また命じてもとの鯛口ならびに鳥居の額を城中に秘蔵し、新たに二物を造って、おのおのの所にかけてさせた。

## 十一面観世音の示現

勝光院豪尊は48度の峰入りを行なった豪である。ある時発願して「昔から十二所大明神の本地は十一面観自在菩薩といわれているが、その実際はわからない。ただその大悲を願って御本体に面礼しよう」と誓い、一夜を期して午前2時上宮に詣で誠心こめて祈った。満願の夜、本御門に急に火事が起こり、烈しい焔が12条、空高く直立した。そのとき十一面観自在菩薩が光を放って焔中に示現された。豪尊歡喜

のあまり礼拝して立ち上がり眼を開くとすでに消えうせていた。豪尊は、仏工を京都から招いて、十一面観自在菩薩ならびに不動・毘沙門<sup>2</sup>大脇立を造立した。これが法華院温泉観音堂の本尊である。

#### 久盛公の寄進

寛永21年（一六四四）中川久盛公朽網郷板桐村において田地若干畝を寄進、これをもって神様へのお供えものの費用に当てた。その証状に次のように手書して交付した。

#### 寄付 九重山大明神

豊後直入郡朽網之内板桐村 田方五石永代寄進意趣者 武運長久為一家栄花並息災安穩寿福増長子孫繁昌 諸人快樂之故仍如件。

#### 鐘 楼 建 立

慶安5年（二六五二）大鐘鑄造して鐘楼を建てこれを懸けさせた。銘は前碧雲乾門和尚の作である。

#### 本 堂 の 改 造

延宝5年（二六七七）中川久清公職務の余暇乗物で山中に遊んだ。大いに神異を感じ帰城のち今の本堂を改造した。

#### 鳥 居 の 改 造

元禄2年（二六八九）中川久恒公は鳥居を改造した。

#### 長 生 銭

正徳5年（二七一五）中川久忠公は役人に命じ銀若干を有氏・栢木・長野3村から借り、長生銭として施して山院の窮乏を救った。

#### 小 鐘 の 鑄 造

寛延4年（二七五一）院中某が協力して小鐘を鑄造、本堂の前に懸け、朝夕打ち鳴して、衆徒の進退を指図した。

#### 石 体 十 一 面 観 自 在 菩 薩 の 安 置

宝曆9年武藤氏庸、靈地に参詣し信仰崇敬の念を加えた。そこで藩主中川久貞公に言上して石体十一面観自在菩薩を彫刻、上宮に安置し、かつ銀10両を与え、安座を修理し供養させた。その後、不動・毘沙門<sup>2</sup>大脇立を造立した。

九重山記の記述は一応ここで終わっているが、明治6年廃仏毀釈の

難にあい一山離散。本坊弘藏坊のみ残つて法華院温泉を経営現在におよんでいる。

### 明和当時の法華院

明和7年仲夏九重山記の著者龍泉山英雄師は九重山を訪ずれたが、当時の九重山のもよみを次のように述べている。

法華院院主勝万院の招きに応じて初めて登山を企てた。その地は麓を距たること直上2里余、石の小径は雲が深く、谷川が遙かに流れている。徐行してやや小径にはいと山の神社がある。雲のかかった樹が深く立ちこみ、森厳な感に打たれて神がおられるようである。また数10歩行くと老松が数株天をさして立っている。

これを松の護法という。ますます前に進むと数百歩のところ到老杉がかげ暗く、深く石窟をおおいかくしている。これを杉の護法といい、さらに進むと屈折した高い坂路にかかるが、これを鍋破という。あるいは天の河を渡るようであり、あるいは霧をつかむようである。肌には汗を出して登ると、木鉾が天を衝いて立っている。これを鉾の峠という。ここに院主が茶器を提げて迎えてくれた。

しばらく休憩して、また草を押し分け、数歩行くと二つの土橋

がある。院主が「この橋は昔玖珠郡田野村の者が、度々境界争いをし、強いて田野橋と名付けたが、今は12橋という。」

と語った。そうこうしているうちに鳥居の所に行けば、額に「九重山大明神」と書いて掲げている。そこでつつしんで参拝した。右をみるとはるかな原野である。土饅頭のようなものが7個ある。近づいてこれをみると、みな法華経を石に彫りつけて埋めた塚である。私が「その数の多いのは珍らしいことである。」といった。すると院主が「この山中にかようなものが、およそ28ヶ所ある。皆法華教1字1石塔である。」と答えた。自分は「これは法華経28の品数になぞらえて建てたものである。これをなしとげるとは非常にむずかしいことだ」といった。また下宮の傍に古碑がある。そこで細かに苔をはぐると文字が現われて「大乘妙典一千部誦誦の供養塔」と書いてあった。院を法華という理由が私によくわかった。というのは、当山は法華経が弘く行なわれた霊地であり、諸天善神の守護するところであつて、国家を鎮護する大宝山である。もつとも尊敬すべき山である。また左方に老杉が幾樹か雲をかこんで盛んに茂っている。その中の大きなのを神木といつており、傍に石廟がある。熊野三所権現の御霊をここに移し祭つたもので、これが下宮である。

また右に鏡のような大石壁が立っている。水の護法岩と刻んである。

勝光院豪尊が立てたもので、峰入り48度のことを略記してある。谷川の水が岩にふれて滝のようであり、岩前まで流れて行き、それがたたえて淵のようになってゐる。ここは修行者が垢離をする所である。ここに記してある豪尊の当山における功労は教えあげることができない。まさに再中興の僧といふべきである。

日が暮れかかったので院に投宿した。谷川の水が夜になると、枕の下にちよろちよろと聞えてくる。この寺の名を清い水の意味の白水とつけたのは当然のことである。聖朝院主が自分を真上百歩ばかりの所に案内した。古樹がおい繁り、奇石が高く重なっている。院主が「これが中宮の古跡である。」といった。ここを二つの護法と名づける。また数歩行くと、石がぬきんで高く立っている。その高さは1丈あまり、これを不動岩という。また吹越護法というものがあり、打越水神というものもある。ともに石窟を廟としている。

院の西南に千尋ほどの絶壁がある。天狗岩がこれでいわゆる弘蔵坊である。みな山中の守りとなるものを祭っているのである。

また泉水山麓に額に似た石がある。その形は人の額を切つて望むようである。上宮に行く路傍に、果して12の経塚がある。深く掌の石を探ると、文字はそっくりそのままである。思うにまた十二所大明神に法施したものであろうか。そうこうしているうちに上宮に参

詣すると、十一面観自在菩薩・不動・毘沙門の全軀が中天にがやいてゐる。めでたい雲気がこの仏法の境界に盛んに立っている。また側には経堂の古跡があり、ここには一個の宝の甕を埋めてある。院主が「ここは正月2日山の衆徒を集めて、国家安全・五穀成就を祈禱するところである。」といった。そこで洗米をお供えすると、

2羽の鳥が飛んできてこれを啄ばんだ。院主が「この鳥は大明神のお使いである。山中唯一つがいいるばかりである。毎春ヒナを育てているが、別にふえることがないのはこれまた一つの不思議なことだ。」と言った。

そうこうしているうちに、少し首を回すと、はげしい光が起つて本御門が急にかげとなり、緑の山気が急に渡ると、北御門が今に晴となる。

三股嵩の雲は雨が池の宿龍をたたせ、千里浜の流は田野村の遊客をまねく。

諏峨守は北境を鎮め、法性崎は西藩（玖珠・直入・肥後領）を護る。その他遠望の景色は記す暇がない。

百歩ばかり上がって大きな谷を見下すと底に水のない円い池がある。院主が「この古い池は昔獵師がはきものを池中に投げこんで汚した。すると、ある夕、水が急になくなって、上にある今の池がい

つばいになった。」と語った。自分がその地形をみると、上の池は高さ百歩ばかり、神力でもないかぎり水が下の池から上に移ることは不可能である。その上その間はせまく丁度堤防のようになって水がもれないのは神が穢を忌み嫌われた証拠だ。」といった。

そこからまた衣の裾をからげて急坂を登ると、絶頂は窪んで霊地となつている。広さはどれほどであろうか。深さは勿論量ることはできない。水をたたえて波がなく一面の宝鏡を開いたようだ。物が現われるとすぐそこに写すのである。参拝者が不信仰であればげしい風が吹いたり、大霧が生じて方向がとれなくなるといういい伝えがある。この水は永く日照りが続いても減らず、どんな大雨が降つても増さぬ不思議な霊池である。自分が思うにここから東南に清泉が所々湧きでて、川や沢となつて流れ、村里のあちこちに分れて、諸所の蒔いた種がよく生え茂り、五穀豊熟・君臣和楽、一般人民が喜び楽しむことができるのは、皆この霊池のおかげであつて、実に神のたまものといわねばならぬ。

漏泉は各所にあるが、中でも山麓山神社付近の漏出は分流となつている。東に流れるものは柏木・湯原・落蛇生之滝を経て府内に至り海に入るものでその間12里。南に流れるものは、石原を過ぎ界川・老野湧泉を合わせて、岡城・犬飼を経て三佐津で海にはいる。そ

の間18里をうるおし、源の水のことを俗に山社之井手泣分れ水と言つている。(以上は龍吉松氏の九重山記註釈を参考にして記した)

### 九重山の信仰

豊後国志によると、当時九州第一および第二の高峰である九重・大船岡山には、それぞれつぎのような修験寺院があつて、山岳信仰を広めていたことがわかる。

#### 九重山明神祠

在<sup>二</sup>朽網郷九重山上<sup>一</sup>。祭綏靖天皇<sup>一</sup>。故其峯曰<sup>三</sup>請山<sup>一</sup>。延曆中所<sup>レ</sup>創。天皇修験歆喜院掌<sup>二</sup>祭事<sup>一</sup>。

#### 歆喜院

在<sup>二</sup>九重山<sup>一</sup>。此山祭<sup>二</sup>綏靖天皇<sup>一</sup>為神。延曆中所<sup>レ</sup>創。文明二年。養順法印掌<sup>二</sup>祭事<sup>一</sup>。相統至<sup>二</sup>千今<sup>一</sup>。

#### 大船山明神祠

在<sup>二</sup>朽網郷大船山上<sup>一</sup>。祭<sup>二</sup>速玉男命。泉事解男命<sup>一</sup>。天長中。光天律師創<sup>レ</sup>之。天正季年。為<sup>二</sup>薩兵所<sup>三</sup>焚毀<sup>一</sup>。山中有<sup>二</sup>石表敗址<sup>一</sup>。

故号<sup>二</sup>其地、日石表窪<sup>一</sup>。日<sup>レ</sup>是至<sup>二</sup>于山上<sup>一</sup>。一里。巖有<sup>二</sup>清池<sup>一</sup>。池傍有<sup>二</sup>石祠<sup>一</sup>。即明神上宮。天台修驗國恩院掌<sup>二</sup>祭事<sup>一</sup>。

## 國恩院

在<sup>二</sup>大船山<sup>一</sup>。天長十年。江之三井寺沙門光天律師。始入<sup>レ</sup>山結<sup>レ</sup>宇。天正中。薩賊攻入。寺宇悉燒滅。文祿三年。修驗泉養坊玄柱再<sup>二</sup>興之一<sup>一</sup>。

以上をみてもわかる通り九重・大船両山ともにその信仰の中心は山頂の火口湖に対する熱烈な信仰である。明治15年失火による古記録の焼失で、法華院の信仰行事を記録の上で探ることができないが、唯一つ残された前掲の九重山記の記事中にもこの霊水が源となり、山麓<sup>一</sup>帯は、そのおかげを蒙<sup>つて</sup>、五穀がよく実り、君臣相和楽（下略）と明記されているのである。昔盛大に行なわれていた春秋<sup>2</sup>期の登拝は、豊作を祈り、豊作を祝う行事であり、また雨乞祈願もこの霊山・霊池に雨を願<sup>つて</sup>、禍をも<sup>つて</sup>福になさんという願望の現われに外ならない。寺号を白水と称したのもこのためであるし、山中には水の護法岩をはじめ、打越水神などが祭られ、大野・大分・玖珠川の水源の山として、水に生産を依存する農民の強い信仰を集めたのである。

毎年正月<sup>2</sup>日に、上宮経堂の宝の甕の前に一山の衆徒が集まり、國家安全・五穀豊熟祈願を行なっていたのは、禪頂行で地方山伏には珍しい宗教行事である。

この禪頂行が盛んに行なわれたのは日光と伯耆大山だが、九重山でもほぼ大山と同様の行事が行なわれていたと想像されるので、大山の場合を記してみよう。大山では毎年5月朔日当番の僧<sup>2</sup>人が常行堂にはい<sup>つて</sup>法華経を書写した。この書写は藁と赤土で書くもので6月14日まで続けられ、14日夜、前年当番の僧の案内で山頂彌山に登るのであるが、この日山内の社僧は神前で法華経を転読し、天魔の障害をふせぐのだ。登頂の僧はかねて用意してある経筒に書写経を入れ、古式通りの儀式経文を読誦、山頂の池の水を禪頂水と書いた四角の桶に<sup>く</sup>み、ヒトツバヨモギ・ダイセンキヤラボクなどの草木と、前年に納経した朽片を持って帰るのである。この日のこの行者に体の悪いところを踏まれたり、草で打たれたりすると病気やケガがなおると信じられ、行者が争<sup>つて</sup>道路い<sup>っぱい</sup>に横たわり、行者の下山を待<sup>つた</sup>といわれている。この行事は現在ではモヒトリ神事といわれ、大神山神社の手で新7月15日に行なわれている。神社の神官<sup>2</sup>人が正・副使とな<sup>つて</sup>先達<sup>2</sup>人（泊村の浦田・三朝町の村上両家世襲）の先導で、午前<sup>2</sup>時奥宮の発遣祭のあと出發登山する。一行は白衣・白袴・白脚絆と白<sup>一</sup>

色の装束に草鞋をはき、ツエをついて登る。旗を持った先達を先頭に、前夜からおこもりしていた人たちも加わり、夜の山道を静かに登っていくのである。頂上に達すると山の祠で簡単なお供えをして祝詞をあげ、

背負ってきた木樽から神酒を池に移し、その代わりに池の水を木樽にくみとる。同時に頂上にはえているヒトツバヨモギなどの薬草をとって帰途につくのである。頂上から持って帰った神水で、このヒトツバヨモギ

を処理してモグサをつくり、希望者にくばる。はいた草鞋では安産のお守りがつくられる。

九重山頂の御池経堂で、正月2日に行なわれた禪頂行も、大山の彌山禪頂とほぼ同様の行事であったことが想像され、一山の衆徒の手でさらに厳肅に行なわれていたと思われる。要するに大山も、九重山も、また大船山もその山頂にある池の神秘が信仰の中心であり、池を源とした水は4方に流下して農業の神水として庶民に尊崇された。一方山中靈域は法華28品の靈地として、もっぱら現世の幸福、すなわち病を除き豊作を望む人たちの登拝が後をたたず、こんこんと湧き出る温泉は医療に利用されたのである。

## 法華院山伏の系譜

本坊 弘 藏 坊

開基 養順法印 文明二庚寅年開基。2世汐順法印、3世前秀法

印、4世快秀法印、5世宜快法印、6世高宗法印、7世栄鎮法印、

8世栄寂法印、9世泉僧法印、10世南口法印(是マデ清僧ト伝フ)。

11世二位法印 元和7年酉年2月9日彦山ヨリ入院初メテ妻帯成

り、同8年9月相統、寛永20癸未年7月7日病死。

12世大越家法印 勝光院豪尊 寛文11辛亥3月5日 二位坊ノ子。

13世快典法印 豊州院 延宝2年4月20日 勝光院ノ子。

14世宜快法印 豊修院 享保19己年3月26日 豊州院ノ子。

15世快豊法印 円明院 宝暦2年9月9日 豊修院ノ子。

16世宜快法印 授良院 宝暦52亥2月12日 円明院ノ子。

17世宜快法印 一國院 明和2酉年9月13日 新昌坊ノ子。

18世有慶法印 勝万院 安永2癸巳10月17日 律門院ノ子。

19世有定法印 宝精院 文化6己年10月21日 求菩提山 観喜院

ノ子。

20世権大僧都法印 豪快大徳靈 文政11年8月 日 隠居名 泉



嶽軒。

21 世豪学

22 世峰雲院 弘藏松五郎

23 世鉞岳院 山田澄次郎

24 世弘藏孟夫

25 世弘藏祐夫

脇坊

中奥東ノ坊

開基 豪僧(清僧)

1 世鎮有 大和尚(清僧)

3 世法華院 中典悲達院(清僧) 寛文5巳10月14日

4 世可院 大能寛 元禄5壬申8月29日

5 世福寿院 慶信 元禄7申戌年8月18日 可院ノ子

6 世寛全坊 惠空 寛保3癸亥年正月23日 本坊18代 豊州院ノ次

男。

7 世宝積院 顯清 開大徳 宝暦3癸酉年11月5日

8 世長久院 宝積院ノ子。

中奥 西ノ坊

開基 起賢法印 清僧

2 世養僧法印

3 世長賢法印

4 世偉門法印 コレヨリ妻帯

5 世勝万院

6 世真教坊 天明3癸卯年2月16日。

7 世賢明坊 天明4甲辰12月20日。

8 世婦峰 真教房 文化12乙亥6月22日。

9 世婦峰 泰元房 知道 文政6癸未12月27日。同坊次男。

中奥 南ノ坊

開基 養権法印

2 世永鎮法印

3 世三河坊 法印

4 世良膳院 勝光院弟

5 世大泉院 光眼 元禄11年9月2日

6 世末光院 宝暦8年7月17日。

7 世政寿院 寛政10年正月21日。

8 世真光坊 文化11年12月19日。

中奥 北ノ坊

開基下野坊法印

2 世駿河坊

3 世永権坊

4 世当山仙養坊 元禄11年4月24日。

5 世婦元仙養坊 享保5年3月26日。

6 世円光院有品大徳 安永2癸巳11月6日。仙養坊ノ子。

7 世恵教坊 寛政10年8月12日。

8 世泉教坊 天保8年2月28日。恵教坊ノ子。東ノ坊清典兄。

以上の系譜は弘藏坊跡法華院温泉弘藏家門外不出の過去帳（21世（豪学の作））によって、弘藏坊及東西南北四脇坊の世代をあらわしたものである。その10世までは伝説時代に属したが、11世二位法印が元和7年彦山より入院し、初めて妻帯した。12世豪尊に至って、珍珠領との国境争いの解決に功勞があり、領主中川侯の信任を受け勢力をえた。法華院が文献的に整備されたのは20世豪学の時だが、法華院を大別して開山が養順、開基を二位、中奥を豪尊、完成を豪学とみるべきであろう。

## 法華院雜録

### 一、寛文騒動

寛文丁未4月28日というから、いまから丁度3百年ばかり前のことである。肥後領久住の郡代白江八左衛門が、九重の庄屋百姓ども60余人に鉄砲<sup>1)</sup>を所持させ、九重山坊中に乗りこんだ。丁度院主豊修院（14世）が留居中だったが、客殿の戸を押し開き神殿にはいりこんで乱暴を働いた。老僧勝光院（12世）がこれを聞きつけて乱暴者出て行けとなりつけたところ、八左衛門は自分は久住の郡代であるといつて寺の事跡を聞きただした末、自分の方では久住山といっているのに、法華院では九重山というのはどうしたわけかと問い詰めた。勝光院は九重山のおこりについてすじみちを立て説明をしたところ、白江らは一言もなく引き下がったが、この騒動がのちに熊本の家老の耳に達し、この年の秋八左衛門は追放されたということが、万延紀元仲秋22世豪学の覚書にのこされている。

### 二、梓立ヒテイ之事

梓立峠の木梓は山岳道場法華院のシンボルである。この梓の書き方について嘉永6年豪学によって記録が残されているが、その形式及書

式は次のとおりである。

棟立ヒテイ書ヨウ寛

一、木コノ長サ 一丈二尺

土中四尺 土上八尺

四天梵字ヲ書ク

東ノ方に

熊野三山檢校官役元

神變大菩薩正

聖護院御門跡

二品雄仁親王

九州豊後国直入郡朽網郷

境地岡領分

九重山白水寺法華院弘藏坊

院主 豪学敬白

時于 嘉永六癸丑年卯月

如意珠日

三十三年目ニ立テカエルコト殺生禁断ノ境界目印ルン

万延紀元年仲秋月

豪学 写ス

三、三ツ岳三尊

教民・由来記に九重・大船・黒岳を、三ツ岳三尊として尊崇したこと  
が記されているが、それによると中世における九重連山の山岳仏教が  
ある程度解明されている。

まず三山を「豊後国直入郡久民に有り三ツ岳共大明神本地観音菩薩  
也。」と記し観音信仰に結びつけている。

大船山については、「日本開闢の諸神が天ツ岩船に乗ってこの嶺に  
船がかりされた。開闢の前からあつたから前岳と称した。前岳の嶺に  
千尋の池千坪程あつていかなるときもにござることがない。人皇30代欽  
明天皇の御宇、行基菩薩が来山されて馬頭観世音を祭り大船山と名付  
けられ、秀丹寺・西蓮寺・岳麓寺の8カ寺12坊を建立した。西蓮寺法印  
唐土沙恵国鶏鳴山の法印、西蓮寺に入り、前岳中の山に百坪ばかりの  
小池より鶏の啼声が聞えたので、法印がかけ登つたら、鶏池に飛入り  
光明を放つて阿彌陀如来像が現われた。西蓮寺の本地仏として以来鶏啼  
山と写した。このため池をあみだ池と称した。秀丹寺、岳麓寺、西蓮

寺ともに天正年間薩軍のため焼失。」と記し、

黒岳については「行基菩薩黒岳に登り、日暮時分より岩間も諸々の木もひかり輝く、岩の上に如意輪觀世音御來現有り、その時色黒き僧出て、三日三夜の閻尊敬した。この僧大天狗の御正体で黒尊岳大明神、東原峠に六三四坊と名付け、東西6坊を建立、黒岳山平蓮寺と号したが天正乱世に破滅した。この上宮は女人禁制である。」

また法華院については次のように記し、硫黄山が九重山奥の院であり女人禁制であったことを明らかにしている。

「九重山法華院白水寺は人皇<sup>8</sup>代孝元天皇の御宇

一、この山の峠に千尋の池と百50坪余一夜に出現。

二、西北の方に当り煙々とうとうと燃えあがり行煙限無し。

三、東の方に当り谷川のほとりに温泉湧き出る。

一夜の内に3つの不思議があり、九重山と名付け西の京と唱えた。

阿部中納言寺を建立せんと思ひ柴を集めておいたが、ここは明神の神意にかなわなかつたとみえ、一夜の内に1里山奥の今の坊中に1人だけ移っていた。法華院白水寺を開き、石原村から貢物を納めた。

中項大先達阿闍梨法印上宮で修業中、池の真中で光明を放ち十一面觀世音が現われた。これは金胎西部の大日如来である。

また御池より裏の谷燃山を拝んだら立ち登る煙の中から不動明王が

現われ、ありがたやと拝するうちに吹き来る風にさらわれ煙とともに隠れた。爾來、燃山は九重山奥の院となり、女人禁制である。

#### 四、金光明院と法華院

大分県直入郡久住町都野地区金光明院は、法華院末寺の坊福寿院が明治の廢仏後帰農し、後都野において明治81年金光明院として再興したものである。

その世代は

第1世 広瀬豪顕、第2世 広瀬亮映、第3世 広瀬豪仙、

第4世 石光宰照、第5世 広瀬宗雄

となっており、門徒2軒、信徒は都野地区全域にわたり、家弘・水神祭・觀音祭・山神祭など加持祈禱に当たっている。本尊は十一面觀世音、脇仏は五智如来である。

なおここに残されている古文書古記録類は次の通りである。

一、門額 九重山福寿院

一、版木

九重山福寿院

奉修仁王般若經全部

除災祈必

一、古地図

九重山清水山絵図

天保15年6月

法華院絵図

大船山絵図

肥後領岡領略略図

九重山堺目画図

一、古文書

九重山福寿院当山児童子手習詞状

農稼証

用文素 天保8丁酉年

猪鹿狼寺の歴史

延暦23年伝教大師最澄が唐に渡り、揚州天台山において密教を学び、帰朝の途中この地に達したが、唐から持ってきた石像および木像十一面観世音を久住山に安置して一字の精舎を営んだ。これが大和山慈尊院と伝えている。山霊を崇めて上宮と称え、下宮の本宮を嶽宮と称え

たが、いまの久住山腹の久住町字本堂が当時の遺構である。嶽宮はその後久住町鉾ノ木および字日の森に移され、新宮と呼ばれている。慈尊院の僧が代々祭事を司どってきた。「観音、令法久住」という法華經の仏語からとって、久志布流岳を改めて久住山と称え、六院十六坊において久住山一帯を殺生禁断の霊場とした。建久年中、富士裾野で巻狩が催された時、源頼朝の臣堀原景季が九州に下向、阿蘇大宮司について巻狩の故実を習うことになり、文治2年9月、阿蘇大宮司の口授を受けたが、大宮司は殺生禁断の禁をおかして久住裾野の高原で巻狩の実演を行なった。猪鹿狼の類多くとれたので頼朝公は畜類供養料として黄金を寄付した。爾来山名を久住山猪鹿狼寺と改めたが、天正14年島津の焼き打ちにあい、いっさいの文書什宝などを失ったのである。のち久住町字山中寺床に再興、さらに現在地の大字中村字狩迫に移した。神仏分離のさい、石像観世音を旧白丹村常楽寺、木像を久住町万休寺に移し現在におよんでいる。

久住山の信仰

山上御池を中心とした霊域に対する信仰であることは、法華院弘藏坊と同様である。このことは、豊後国誌の次の記述に明らかである。

(原漢文) 大船の西にあつて、高さは大船とほぼ同じである。広大さは3〜4倍もあり、其の足周囲は6〜7里、高峯8〜9。深い谷は無数である。形は9山相合するようにみえるので九重の名がある。南面第1峯、上に2つの大きな池がある。1つを空池と言ひ水が無く、深さは3百仞もある。1つの池を猪鹿狼寺と言ひ漾々として湖の如く、その深さは知らない。神異常に多く、衆民皆これを懼れている。岩側に石があり、前面平たく10数人が坐することができる。ここが拜神のところである。虎杖窪・鳴子平等最も坂が急で、その後の峯に祠がある。綏靖天皇を祭り、この山を神と崇め、延暦以降これを祭っている。僧坊34区あつて皆修験者である。以下略。

以上でもわかる通り、神秘の池、神の池・御池を猪鹿狼寺として尊崇しているのである。岳詣りの信仰も、さまざまの宗教行事も、法華院と全く同様で、もつとも原始的な山岳信仰のなごりをとどめているのである。

### 猪鹿狼寺の系譜

寛永年中、三位宝教坊再興、2世 惠尊院、3世 南龍坊、

4世 寿宝院、5世 知輪院、6世 観明坊、7世 惠照坊、  
8世 光浮、9世 三位、10世 光円、11世 光解、12世 光然、  
13世 〇〇、14世 〇〇、15世 光栄(文化十二年)、16世 光隆  
(文政四年)、17世 光園(天保十二年)、18世 光然(安政三年)、  
19世 日言、20世 光観(明治十八年)、21世 順観(明治四十二年)、  
22世 宰照(昭和二十四年)、23世 孝照(現在)

猪鹿狼寺で任職が絶えると阿蘇山西願殿寺から任職を送つたと伝え  
ている。

### 古文書古記録

明治初年の神仏分離に災いされて、ここの古文書もほとんど失われ  
ている。わずかに現存する古地図古文書類は次のとおりである。

### 地図

一、久住山図 正保2年作

この地図によると、古御池および新御池の東横手に本堂あり、ま  
た久住山真下に猪鹿狼寺の本堂がある。

大船山は朽網山と記載されている。

正保2年諸国一統図絵を宝曆7年7月写したものを。

後書

文政年間右者久住手永天台宗諸堂間投仏像私共立会相違無之御座  
調ノ上絵図面相添願上申度如件。

文政六年九月

志賀六十郎 後藤伝十郎 本江彌右エ門

榎木野三之丞 後藤唯之丞

齊藤 三郎 殿

井上平左エ門 殿

二、久住手永絵図 文政6年9月作

木 像

十一面観世音菩薩

門 額

久住山額 輪王寺宮筆勅額

はし が き

九重山金山坊は九重山の北面飯田高原、正式には大分県玖珠郡九重  
町飯田地区大字巖野に栄えた彦山派に属する修験山伏である。正しく  
は九重山星性院幸水寺金山坊と呼び硫黄山の守山伏であった。とても  
に硫黄山の硫黄採集の一部をとり、本山英彦山に納めており、英彦山  
にとつてはドル箱的存在であったのである。以下金山坊に現存する数  
百通の資料から地方山伏の実体を明らかにしてみよう。

金山坊の山伏たち

金山坊ははじめ天台宗法華院に属した山伏であったが、後法華院か  
らわかれて彦山派に属したことは次の古文書によって明らかである。

(九重町飯田支所蔵山中文書)

天正年中以来住古ヨリ申伝田野村方之事也

山伏金山坊元祖

豊前小倉領ヨリ山伏来り硫黄山坊原ニ住ス、初発明寿院法華院山端ニ入也

二代明合院此院彦山端ニ成楮原ニ下り、三代目実殿院者森治郎右衛門長男山伏之養子ニ成、四代正寿院、五代寿福院、六代寿宝院、七代千寿院、八代金山山伏止メ

とあるとおり、法華院に属したが、恐らくは岡藩と玖珠領の境界争い  
にまきこまれて法華院を離れ、英彦山に属したものとされる。

金山家位牌による金山坊の世代は、現当主金山隆和氏までで12代となつており、前掲山中文書と二代の差があるようだ。

1代不明。2代不明。3代明護院（正徳4年）。4代実相院（享保4年）。5代松樹院（天明7年）。6代寿福院（文政7年）。7代寿宝院（文久8年）。8代千寿院。9代耕院。10代金山伏。11代金山辰己。12代金山隆和

以上が近世活火山硫黄山の信仰を広め、日田・玖珠郡内に活躍した金山坊の山伏たちである。

## 金山坊の活躍

ところで金山坊の信仰の中心はなんであつたろうか。天保9年3月

村明細帳によると

硫黄山の噴気口を九重山大明神と崇めており、守山伏は金山坊権律師寿宝院と言つて麓村内に居住した。

と記してある通り、九重の信仰は一方は山頂御池であり、また他の一方は硫黄山の火山活動であつたわけである。水と火に対する原始的な信仰が近世にはいつて山岳仏教と結びついたのである。その祭祠も複雑で多くの摂社を持った。九重社由緒書上記によると、九重社の祭祠は法華院および猪鹿狼寺と同じく、綏靖天皇が上げられ、本尊は観世音菩薩であつた。また摂社は、

若宮八幡宮（字鍛冶屋・祭神大鶴鶴命）

祇園社（字下之畑・祭神素戔鳴命）

稲荷社（字ヲキ釣・祭神倉稲魂命）

水神社（字大地獄・祭神水分神）

山神社（字日向・祭神大山祇命）

愛宕社（字山石ノ上・祭神火具都智命）

稲荷社（字足向・祭神倉稲魂命）

の7社におよんでおり、山伏の信仰圏の広さを物語っている。金山坊の役目の1つは強弱常ならぬ硫黄山の火山活動に対する祈念であつた。このことは安政3年辰5月清浄法印が日田市役所池田右之丞に差し出した次の口上書でも知ることができる。（原漢文）



この度、お寺の梵鐘のうち、本寺並古からの名鐘、時鐘などを除き、その他は大砲小銃に誘換るよう申付けられました。当寺は本山英彦山から当国の触頭の役を仰せ付かり、本山と同一の掛所でございませう。その上硫黄山の祈念所で、折々山荒れ、大風、地震などで耕作に差つかえ、村民が難渋いたしますときは、梵鐘を鳴し、大いに祈念して山霊を鎮めなければなりません。右様のわけで、もし梵鐘を差出しますと修験の法も相勤めることができませんので何卒格別のお取計らいで当寺の梵鐘は差出すことをお許し下さいますよう。ひとえにお願い申し上げます。

この梵鐘は文政3年辰4月寿福院清調の発起で、別府計屋安部繁右衛門および田野村庄屋橋爪彌惣兵衛が施主となった。高さ3尺3寸6分、廻り5尺1寸7分の梵鐘であった。

ところで金山坊には今1つの大きな役目があつたのである。それは硫黄山の硫黄採集の上がりのうち3割を守山伏の特権として徴収していたことが、数多くの古文書で判明している。しかしながら莫大な収入もことあるたびに英彦山霊仙寺に吸い上げられ、金山坊は英彦山のドル箱的存在でもあつたのである。上納の例1・2を上げると

貫主公当秋御入峯御修行  
扱又今般縁組

関白殿下之依台命役僧御被為登

○以勝手向御逼迫ニ付為御手伝

白銀三拾枚乞献納以御裏詞者

而及沙汰仍而執達如件

英彦山執事

正廉院法印 (花押)

天保十五年辰十二月

玖珠郡九重山

金山坊

覚

一、銀七貫五百目

右官物儲受取

令被露草

霊仙寺執事

雲祥院 (花押)

岡坊 (花押)

などがあるが、一山伏でもって銀80枚の上納は相当の財力であったことが想像される。このような財力をもって金山坊は年2割の高利で金を貸し付け、山林田畑を手に入れた。手許の資料によると、佐伯山師久作に口入れ請け人田野村久作の保証で4両を借し、また下畑29歩を丁銀6貫文で買い受けたなど10数件があるほどである。

このように財力を誇った金山坊も一時は経済的に行き詰まったこともあるらしい。5代松樹院と6代寿福院が、日田御役所に対し、玖珠郡ばかりでなく日田御役所支配の他郡にまで祈禱廻村の申請をしているのである。すなわち、

乍恐以書付奉願上口上書

という文書によると、

自分は玖珠郡田野村九重山に勤める山伏であるが、先祖代々田野村は勿論隣村まで廻禮して祈禱してきました。ところが、近年不作が続き御発穂などが年々減ってきましたうえ、田野村硫黄山も近年火勢が減ってきたため、すっかり収入がなくなり、ますますもって坊跡の相続が困難になってきたのであります。まことに恐れ多いお願いですが、御憐愍をもつて御支配中の御祈禱をさせて頂きますよう

お願い申し上げます。これは私の親の実相院もさせて頂いた例もありますので、玖珠郡内は軒別、他郡御支配所は村々庄屋元へ祈禱させて頂くようお願い下さいますようお願いいたします。

と泣きごとを述べているのである。もちろんゼスチニアもあるうが硫黄山の硫黄採集高によって経済に大きな変動がきたことがうかがえる。

また峯入りにさいしては、

そもそも御領玖珠郡田野村九重山大明神の山伏、俗に九重山金山坊と申すは私ですが、せがれの西正が未だ官職なく、みねいりを思い立ちましたが、無寺領のうえ貧地ですので、且那中では到底力およばず、衆力万人に御協力をお願いしたく、ついでには1人丁銀8文と定めて集めさせて頂いております。

という意味の回状を回し、寄付を集めて峰入りに当たっているのである。

ところで英彦山派の金山坊も、阿蘇修験と相当な関係を持っていたことが金山坊文書で解明され、さいきん学界で話題となってきたのである。寛政8辰9月阿蘇山成満院内大貳の弟子で48才になる円泰坊が金山坊の弟子となり、前記大貳および阿蘇郡井手村兵右衛門が請合証文を出しているほか、同種の交流文書が教通残されている。一方同じ

く英彦山派に属する檜原山および求菩提山の山伏はどうしたわけか仲が悪く争論の証人になることを拒否しているようだ。

それは享和4年子正月24日九重山弟子教海が、玖珠郡四日市村饒右衛門方で森町友吉というものと争論の末、教海は友吉のため大切な袈裟を土尼にかけられ、九重山から森町に対し掛け合ったが、ついに公事御吟味という大事件になった。ところが、立合証文として檜原山桜本坊および求菩提山福寿院が拒否した文書が残されているが、同派同業で証人を拒否したということは余程含むところがあつたのであろう。

金山坊の山伏たちは、こうして玖珠郡ばかりか他郡の天領支配地まで九重山の信仰を広めて廻つた。現に大分県日田郡中津江村で金山坊の祈禱札が発見されており、その信仰伝播の範囲の広さに驚かされている。これは英彦山をバックに天領の支配力を利用して信仰を広めていったのである。法華院山伏は杵瀬郷を中心とした岡藩を根城とし、久住山猪鹿狼寺は僅かに久住町一帯を信仰圏としたのにたいし、この九重山金山坊は玖珠・日田二郡から小国方面まで九重大明神の靈験を喧伝して行つたのである。この点九重山宣伝の先駆者といわねばならない。

## 山伏の墮落

このように靈山高岳の信仰を広めた山伏たちも墮落した時期があつたらしい。これは聖護院・三宝院の中央修験ばかりでなく英彦山のような地方修験でもそうであつた。

金山坊から享保2年(一八〇二)起証文を出したのにもかわらず、英彦山靈仙寺からさらに安政3年(一八五六)に修験中御徒之事という触状を出しているのである。さきに金山坊が起証した内容は、

- 一、盗みを致しません。
- 一、博奕を打ちません。
- 一、人の妻を盗みとつて逃走致しません。
- 一、けんか口論に助言致しません。
- 一、諸宗諸方且つよそ向の祈禱の悪口を言いません。
- 一、飲酒は盃一杯より用いません。
- 一、人の損や得について無益の事に立入りません。
- 一、毎月一回勤めのときこの神文を読み堅く守ります。
- 右の条々に違背したときは諸々の神仏の罰を受けるばかりでなく、現世では悪病をうけ、福を失い、貧乏になり、人の愛敬を失うものであります。

という意味であり、当時の山伏たちの破戒墮落を自戒させているのである。安政8年にいたつては、修験道界にあつて修験別本寺として優

位を誇つた英彦山山伏も一般の御師・山伏の腐敗と同様であつたらしく、とくに貫主公の仰せとして、英彦山執事大先達法印正応坊淨典、伝灯大先達法印大謙院賢相、伝灯大越家法印正隆院徳宗の連名で、英彦山山伏としての襟度を保つよう要望しているのである。掟状による

と(原漢文)

一、峯中の秘事は未修行の人並に他派の者に対して濫りに口外してはならない。

一、修験道の衣鉢は他派をまじえず、必ず彦山派の古法を守るべきである。

ただし諸国の御末派の者たちは三峯修業という名目を立てているが、当道の修練所は六峯といつて胎金蘇悉地の修行といつてゐるのである。

出羽羽黒山は高祖が開基したかどうか他派にはわからないが、今は秋の1季のみ修行しているようだ。当山(真言宗三寶院派)

本山(天台宗聖護院派)は3季の修行があるが、數百年間断絶していたのを聖宝が再興したもので、3季もまれにはあつたものの、後醍醐天皇のころ当山・本山ともに中絶した。その後ようやく享祿のころ、またまた再興したが、その後どんなことになつてい

か知らない。

英彦山は、大宝以来3季修業をとどこおりなく続けてきた本朝

無双の修験所で、英彦山に伝るところの古伝を公儀へ申上げたところ、元禄9年修験別本寺の印証を下げ渡され、これからさき、

他派と混同してはいけなさと公命があつた。そのような由緒ある行法であるから、

一、御正法は勿論相背いてはいけない。

一、檀家に対しては正しい方法により祈念すべきで、自分の世渡りのため邪法を用いてはならない。

一、法中不相応の行跡がないよう気をつけねばならぬ。

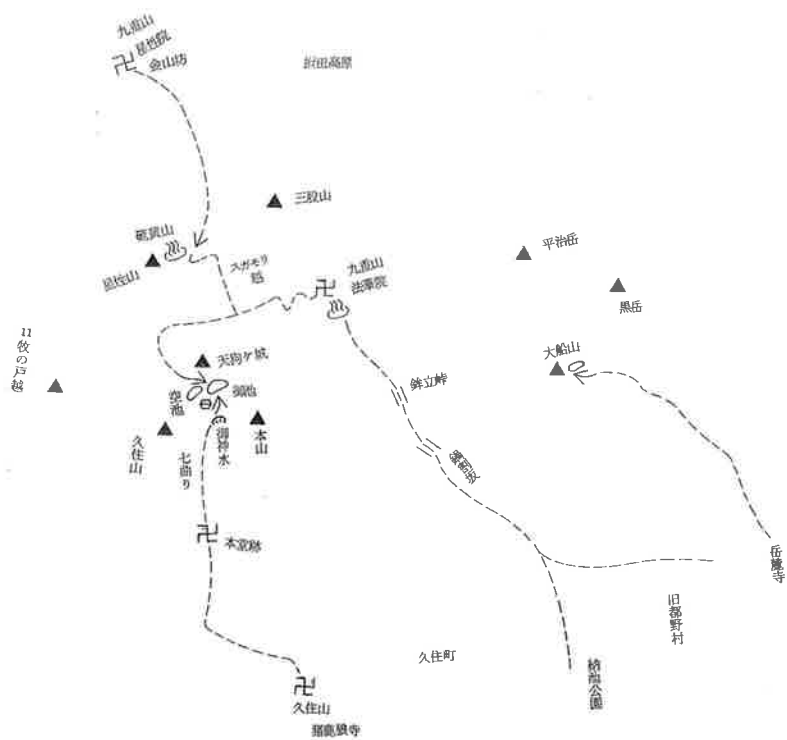
右の条法は古くからきまつたことであるが、近年乱れてきたので、このたびとくに座主公から仰せ出だされ、九重山金山坊に対して触れをする。

というものである。

おわりに

九重山金山坊は地方修験の典型的なものである。現在なお百數十通の古文書が残され、板木・仏像・鐘・薬の功能書の板木など數多くのものが保存されている。家屋もまた修験寺院当時の模様をほぼ伝え、

九重山（久住山）大船山参拝巡路



九重社・護摩堂などいまのところ昔のままである。ただ古老が少なく風習や行法、祭事などがわからないのが残念であるが、これも今後の研究によっておいおい考究されてくると思う。いま登山者のメッカとなっている九重山も、数百年前からすでに金山坊の手で開発され、さらに阿蘇山、英彦山、檜原山、求菩提山と連絡がとられ、九重山の北および西麓一帯に信仰の山九重の名が広められたのである。山の人たちの手で大いにその功績を顕彰されるべきであろう。

六部 敵

現住所 別府市上原町3ノ14

勤務先 別府市石垣小学校・別府市文化財調査委員

所属学会 大分県地理学会

著書 豊後国近世地方史料(一、二、三、十一、十二)。

主要研究テーマ 近世地方史料・史料の教材化・竹の歴史。

七部 多喜男

現住所 大分市新貝四八の五

勤務先 大分舞鶴高校・大分県文化財専門委員。

著書 地名覚書(いずみ書房)・大分県史料民俗資料(半田康夫・

染矢多喜男共著)・大分県の民俗(染矢多喜男編)など。

主要研究テーマ 民俗・民俗芸能

藤原 正 教

現住所 大分市羽屋5組

勤務先 大分上野丘高校

所属学会 日本社会科教育学会

著書 歴史教育の理論と実践(東洋館)・歴史その教育(葵書房)・

社会科歴史教育・歴史教育の計画と展開・歴史指導の充実

と発展・歴史教授法・九州文化風土記など共同執筆多数。

松岡 実

現住所 別府市鉄輪

職業 旅館うかり荘経営・大先達大僧都法印

著書 大分県修験資料

主要研究テーマ 修験道